

SOLA 特別号「豪雨をもたらす停滞性降水系—線状降水帯—研究の新展開」論文募集

SOLA 編集委員会

下記の通り、テーマ「豪雨をもたらす停滞性降水系—線状降水帯—研究の新展開」での SOLA 特別号への論文投稿を募集いたしますので、ふるってご投稿くださいますようお願いいたします。

記

(1) テーマ

「豪雨をもたらす停滞性降水系—線状降水帯—研究の新展開」

“Advances in Studies of Torrential-Rain-Producing Quasi-Stationary Band-Shaped Precipitating Systems, or ‘Senjo-Kousuitai’”

我が国では、暖候期には、梅雨前線や台風などに伴い、しばしば集中豪雨が発生し、時には社会に大きな影響を及ぼす。最近の国内での激甚な豪雨災害（平成29年7月九州北部豪雨、平成30年7月豪雨、令和2年7月豪雨など）を受け、防災・減災のために集中豪雨をもたらす気象現象の理解と予測が必要不可欠であるとの認識が高まっている。特に、線状降水帯はこういった豪雨災害の大多数を引き起こす主要因として挙げられ、その実態や発生機構を理解し、予測精度を向上させることは、学術研究においても気象予報の実務においても喫緊の課題である。2022年梅雨期には、気象庁や日本国内の多数の大学・研究機関が参画した大規模な集中観測実験が実施された。また、同年夏季には日本国内の各地で線状降水帯が多発し、その脅威があらためて認識されている。現業面では、気象庁は線状降水帯の発生を知らせる「顕著な大雨に関する気象情報」の発表を2022年6月より開始し、2023年5月からは10～30分先の解析を考慮したより迅速な情報提供を始め、線状降水帯による豪雨災害軽減のための取り組みを進めている。さらに、過去の気象レーダーや観測データを活用した日本国内の領域再解析データが作成中であり、過去の歴史的な豪雨事例を現在の視点で分析・研究することが可能となってきた。本特別号では、上記の関連の研究の速報として、特に2022年梅雨期の集中観測実験に係る研究、最近の集中豪雨をもたらした線状降水帯の事例解析、再解析データなど

を活用した過去の顕著事例の解析、さらには、線状降水帯の将来の気候変動の影響の分析など、豪雨をもたらす降水系の実態や発生機構、予測可能性、気候変動の影響等の問題に関連した論文を募集する。本特別号では、線状降水帯は日本周辺の特有な現象なのか、あるいは国外でも一般的に見られる現象なのかといった観点から、国内外の線状降水帯の類似現象の比較解析についての議論も期待したい。

論文中での線状降水帯の呼称について：

国内では、「線状降水帯」の呼称が定着しているが、英語名称についてはまだ確定していない。現象面の特徴から quasi-stationary band-shaped precipitating systems を本特別号のタイトルに使うこととした。文献中には、類似現象について quasi-stationary mesoscale convective systems が使われることも多い。また、Kato (2020) では、日本において強雨をもたらす準停滞性の線状降水帯について、日本語の“senjo-kousuitai”を使うことを提案している。本特別号では、それぞれの著者の見識において、線状降水帯の論文中での呼称を定めていただきたい。

Kato, T., 2020: Quasi-stationary band-shaped precipitation systems, named “senjo-kousuitai”, causing localized heavy rainfall in Japan. *J. Meteor. Soc. Japan*, 98, 485-509, doi:10.2151/jmsj.2020-029.

(2) 論文投稿

以下のオンライン投稿システムから論文投稿をお願いします。投稿時に、システム上で特別号「Quasi-Stationary Precipitating Systems」を選択してください。また、カバーレターにも本特別号向けの投稿であることを明記してください。

<https://mc.manuscriptcentral.com/sola>

(3) スケジュール

投稿締切：

2024年8月31日

出版：

2024年内 (Volume 20B)

(4) 編集委員会の構成

委員長：佐藤正樹（東京大学）

副委員長：竹見哲也（京都大学）（SOLA 編集委員長）
加藤輝之（気象研究所）
瀬古 弘（気象研究所）
永戸久喜（気象研究所）

編集委員：

伊藤純至（東北大学）、今田由紀子（東京大学）、
川野哲也（九州大学）、篠田太郎（名古屋大学）、
本田 匠（北海道大学）、益子 渉（気象研究所）、
万田敦昌（三重大学）、安永数明（富山大学）
